サンデー経済

多彩な客でにぎわう

にいがたの老舗 100年の系譜

宴に時代映す 長養館(上越市) ②

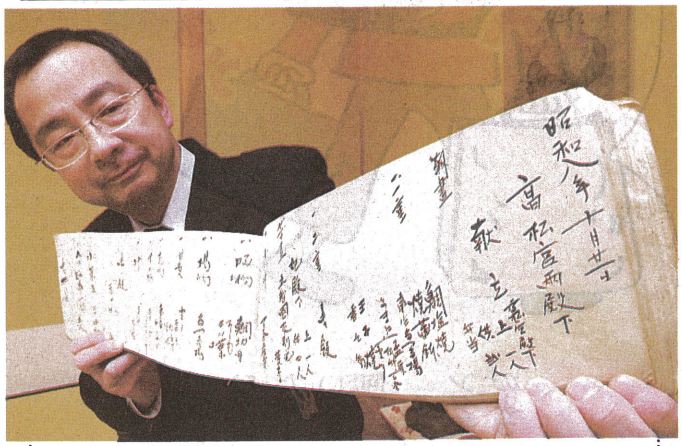
1907(明治40)年、料亭「長養館」が店を構える高田町(現上越市)に、旧陸軍第13師団設置の知らせが届いた。当時の高田町は、明治維新で高田藩が廃止。高田県へと改められ、さらに柏崎県を経て新潟県へと統合された。地方政治の中心という機能を失った上、役人が地域から大幅に減り、町は勢いを失っていた。朗報に町は沸いた。

「大きな産業もない高田にとって、師団設置は希望だったのでしょう」と長養館の吉原耕一社長(55)。上越市史は、誘致を目指す高田町長が陸軍大臣に旧高田城の土地約32万坪の献納を申し出たと記し、町の期待の強さを伝える。

翌08年、兵士約3600人からなる師団は、3年後に市制施行を控えた高田に入り始める。兵士と家族が住む不動産の高騰、入営・除隊時に立ち寄る写真館やみやげ屋の活況など経済効果は多方面に広がった。

長養館にも波及し、にぎわった。既に地域一番の格式を認められていた料亭へは、すぐに上級軍人が出入りするようになった。

当時の当主は吉原社長の曽祖父、吉原和助。町内のかまぼこ店から婿入りし、



長養館に残る献立表。次回来店時に違う料理を出したり、好みをくんで献立を組んだりともてなしに役立てた＝上越市寺町2

師団設置で軍人も愛用

温和な人柄で長養館を率いた。妻でおかみのミカは家付き娘。「勝ち気で、若い軍人に『うちに来るのはまだ早い』と言い放ったこともあるようです」と吉原社長は苦笑する。

それでも長養館の料理ともてなしを求める兵士は途切れず、夜になればお付きの部下が馬とともに、店の近くで上官が出てくるのを待った。軍関係者は太平洋戦争前まで、店の上得意となった。

大正から昭和の初めにかけては、陸軍の要職にあった後の首相・東久邇宮稔彦など皇室関係者が公式、非公式に長養館を訪れた。

24(大正13)年11月には、皇太子(後の昭和天皇)が金沢で陸軍の演習を監督した後、高田市を訪問。長養館は、料理を任された。献立は不明だが、随行の役人が消毒用アルコールを出来たての料理に吹きかけ、それを見た和助らが「何をする。味が変わってしまう」と怒ったという話が残っている。

諏訪村(現上越市)出身の外交官、芳沢謙吉が娘婿だった第29代首相の犬養毅や、アジア主義の大物として知られる頭山満らが宴を開いたことが、長養館に残る書で伝わる。「どのお客さまにもくつろいでもらうため、揮毫(きごう)を求めることは控えてきた店。何度か足を運ぶ中で、自ら書いてくださったのではないか」と吉原社長は推測する。

書家としても名高い犬養は漢詩を店のためにしたためた。その1首、「林昏天未曙(林くれて天未だあけず)…」のくだりを含む漢詩は装丁され、今も長養館にある。吉原社長は「時局から来る憂いか、どこか暗さがにじむ」と眺める。31年に首相に就いた犬養は翌32年、五・一五事件で海軍青年将校らに暗殺される。政党政治は終わりを告げ、国内は一気に軍事色を強める。

41年に太平洋戦争が始まり、物資の統制は徐々に日用品にまで及ぶ。心尽くしの料理で、華やかな宴席を提供してきた長養館に、営業さえ困難な時代が訪れた。

3月初旬の、ひなまつりにちなんだ料理。季節感を目と舌で楽しめるよう心を配る＝上越市寺町2の長養館